

京都大学	博士 ( 教育学 )	氏名	河野一紀
論文題目	心理臨床におけることばと知について—ラカン派精神分析の視点から—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、心理臨床における「ことば」と「知」について、<b>Freud,S.</b> と <b>Lacan,J.</b> の精神分析理論に基づいて検討を行なうものである。それぞれのテーマを扱った第一部と第二部での議論から、ことばと知には「欠如」が内在しているということが示され、第三部では、その欠如の否認や排除という事態が今日の臨床において出会われる様々な問題を引き起こしているということが明らかにされるとともに、それらに対する心理臨床の視座からの考察や取り組みの可能性が論じられた。</p> <p>第一章では、<b>Freud</b>から<b>Lacan</b>への精神分析理論の展開における言語についての思索を整理しつつ、そこから導き出された意味の次元にとどまらない<b>Lacan</b>派における解釈の在り方についての検討が行われた。<b>Freud</b>はその最初期の思索である失語症論からすでに、ことばを意味の次元に還元しえないものとして考えており、<b>Lacan</b>のシニフィアン概念はこれを受け継ぎ概念化したものであるということが示された。さらに、意味を超えた現実的なものの次元に影響を与えうるような解釈の在り方にかかわる<b>Lacan</b>自身の思索の展開と、そこから導き出された現在の<b>Lacan</b>派を特徴づける、無意味を目指した「切断としての解釈」が論じられた。</p> <p>第二章では、分析哲学における<b>Davidson,D.</b> の論を詳細に検討することを通して、人間理解の中心にことばの問題を据えた<b>Lacan</b>の精神分析における意味や真理といった概念や、話す主体にとっての言語習得の問題について考察された。<b>Davidson</b>は、発話の理解、すなわち、聴くことを議論の出発点とし、そこから、一般的に命題的態度と呼ばれる信念や欲望と発話の関係や、真理概念についての議論を展開しているが、これらの知見は、精神分析における言語についての理解や、解釈という行為の在り方について、言語哲学的な観点からさらなる考察を付加しうるものであることが指摘された。</p> <p>第三章では、<b>Lacan</b>によるエディプス・コンプレックスの再概念化と、後年になされた批判的検討から導き出されたシニフィアンの起源と主体の生成に関する理論的展開が論じられた。人間存在の根底にある欠如が、ことばによって欲求から要求、そして欲望へと象徴的な形に構造化されることで、主体は他者との関係において、欲望する存在、知ることを欲する存在として、生物学的次元に還元不可能なものとして自分自身を打ち立てるとということが示された。</p> <p>第四章では、心理臨床における知の在り方について、精神分析から今日の心理臨床に至るまで、その理論において中心を占める無意識の概念をもとに考察が行われた。心理臨床の知は、クライアントの欠如を埋めるものではなく、そこで賭金となるのは、こころについての知の想定や信を引き受けることによって人間関係を築き、そこで出会われる理解できないものや未知のものについて問い、それを知ろうとする試みを支え、心理臨床家の実践の原動力となるものとしての知であるということが指摘された。</p> <p>第五章では、現在問題となっている軽度発達障害や成人の発達障害をも含み、極めて幅広いものとなっている「発達障害」というカテゴリーは、自閉症研究に基づいた理解によってカバーできるものではないことを指摘し、従来の「発達障害」研究に代わる新たな試みとして、「発達障害」を倒錯として見立てることを通じて、「発達障害」と診断されている主体に見られる特徴についての理解を発展させることが試みら</p>			

(続紙 2)

れた。加えて、そのような主体に関わる際のセラピストの位置や治療構造についても検討がなされ、「知っていると想定される主体としての位置に基づいた中立性の放棄」と「セラピストが自らの欠如を認め、その欠如を介してクライアントと出会うことによって、対称性に基づいた関係に非対称性を持ち込むこと」という二つの方針が提示された。また、倒錯という主体の在り方は、心理臨床を取り巻く現状への警鐘としても受け取られねばならないものであるとも指摘された。

第六章では、現代における主体を取り巻く社会の変化とそれらが主体にもたらす困難について論じられた。今日においては、こころの問題が個人へと囲い込まれ、個人を自律的存在として考える傾向があるが、これは近代国家の成立に不可欠であった統計学というテクノロジーに裏付けられたものであり、その優位が極端にまで推し進められることで、平均的なものとして定義された規範としての正常性が、法に取って代わるという事態を明らかにした。そして、この事態は去勢の「排除」を引き起こし、主体は欲望を維持するための象徴的同一化の対象を失い、精神病的な在り方をとったり、うつやアディクションなどの様相を呈したりするようになる可能性が指摘された。

結論においては、以上の議論を踏まえて、心理臨床実践への取り組みにおいて、ことばと知がもちうる今日的意義について、それらに内在する欠如について問うことが、主体の固有性を真に問うことへとわれわれを導くと同時に、心理臨床の営みはその固有性を維持しつつ、深化していくことを可能にするものであると結論した。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、そのタイトルにもある通り、「心理臨床におけることばと知」について精神分析的な観点から論じたものである。

言語に関しては、思想や哲学の領域において、統語論、意味論、語用論といった区分からの論考が中心的なものでなくなるのと軌を一にして、精神分析学を中心とした心理臨床学の領域でも、われわれの体験世界が言語に基づいて構造化されることは認めつつも、その議論自体はむしろ、その使用や運用という観点から、すなわち、技法論としてよりプラグマティックに論じられることが多くなってきており、このことは、本論文でその論考のベースとなっているLacan, J.以降、特に顕著である。

そのような今日的な潮流のなか、本研究はあらためて、心理臨床における「ことば」とそれに基づいて形成される「知」について論考することを試みた本格的なものであり、とりわけ、以下の4点において高く評価できる。

第一に評価できるのは、「ヒステリー研究」以前に遡り、「失語症の理解に向けて」においてFreud, S. が想定した、語表象と対象表象という対立概念に基づく言語装置に、その後の「ことばの意味の裂け目に見出される無意識」という考えの萌芽を読み取り、語をそれ自体で独立した意味の単位とは捉えないという共通性から、Lacanにおけるシニフィアン理論と連なりを明らかにした点である。このことによって、意味の連鎖を追うことに終始しない分析家の介入としてのLacan自身による「句読法」や、そこからのさらなる理論的な展開としてのMiller, J-A. の「切断としての解釈」という新たな解釈の在り様をより理解しやすい形で呈示することが可能となっている。

第二は、アメリカの分析哲学者Davidson, D. の言語論を詳細に検討することを通して、ともすれば理解しがたいLacanの精神分析における意味や真理の概念を明らかにし、様々な意味で言語を介してしかなされえない心理臨床という営みにおいて本質的なものと見なしうる、「話す主体」としての人間の言語習得という問題に肉迫しえたという点である。発話や思考にその内容を与えるのは、われわれが行うコミュニケーションである、というDavidsonの行為論的言語論は、コミュニケーション障害としての発達障害の理解とその対応という点から考えても、今後心理臨床学の領域においてさらに注目されて然るべきものであり、その先駆けとなった功績は大きい。

第三は、第三部で現代における主体について論じる基盤ともなっているのだが、Lacanによるエディプス・コンプレックスの再概念化を慎重にレビューすることによって、Freudにおいては「想像的なもの」であった父が、Lacanにおいては「象徴的なもの」として捉え直されており、母の不在から母の欲望と母の欠如へと導かれ、そこにファルスの存在を見出しうるか否かに、父性機能に特徴づけられた主体の構造化というプロセスにその子どもが参入しうるか否かがかかっていることを、すなわち、エディプス・コンプレックスを通じて欲望をもった主体として立ち現れることは、欠如を抱え込んだ存在となることに他ならないことを明らかにした点である。このようなエディプス的存在になりうるか否かが、倒錯者・神経症者の主体と精神病者の主体との境目であり、わが国の心理臨床において現在一般的に想定されている「病態水準」という観点とは一線を画する「見立て」の在り方がそこには提示されている。

第四は、このことが本論文において最も高く評価しうる点であるが、発達障害を中心とした現代における主体の在り方の特徴と彼らが陥っている困難、さらにはそ

のような主体に対する心理療法の新しい在り方を、自らの心理臨床実践の体験から極めて具体的に論じることを試みた点である。特筆すべきは、主としてLacan派精神分析の立場から、①いわゆる自閉症と、現在広く発達障害と呼ばれている事態とを区別し、後者を他者の欠如や欲望を否認する「倒錯」として理解することを提唱したこと、また、②Lebrun, J-P. の「ふつうの倒錯」という概念を導入し、「他者なしの主体」としての発達障害、とりわけ、軽度発達障害の範疇に入る成人のクライアントの特徴を的確に素描しえたこと、③そのような新たな主体に対する心理療法において「知っていると思定される主体としての位置に基づいた中立性の放棄」と「セラピストが自らの欠如を認め、その欠如を介してクライアントと出会うことによって、対称性に基づいた関係に非対称性を持ち込むこと」という新たな二つの方針を提示したこと、さらには、④Miller, J-A.の「ふつうの精神病」という概念をも導入することにより、第3章と第4章で自らが提示した、倒錯的・神経症的な主体と精神病的な主体との境目さえもが不分明なものとなる現代におけるボーダレスな精神状況を描出しえたこと等である。これらは、言うまでもなく、第一部と第二部における論考の連続線上に展開されているものであって、論としての一貫性という点でも非常に説得力があり、現代における主体への新たな治療論としても高く評価できる。

試問においては、上記の心理療法における新たな方針と実際の面接場面での著者による介入との間にズレが存在しているのではないか、あるいは、「欠如」が生まれるというよりは、作り物としての「欠如」をクライアントに注入し、それを操作しているにすぎないのではないか、という疑問も呈された。また、各論的には革新的なことを主張しつつも、全体としては「主体が耐えうるかたちで他者との関係に欠如を位置づけていくことを目指した心理療法」等の表現に見られるように、ある種の予定調和的な結論に落ち着いてしまっているのではないか、という指摘もあった。

しかし、これら問題点の指摘は、現代における主体に対する心理療法の新たな在り方という本研究が挑戦したテーマの内包する豊かな発展可能性を示すものであり、著者が今後心理臨床実践の経験を蓄積するなかでさらに深めるべきポイントが明確になったということであって、本研究の価値をいささかも損なうものではない。

よって本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成24年3月14日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：                    年            月            日以降